

## 『黄泉遊』

僕は姉さんに会いたかったただだった。  
ただ、姉さんに会いたかったただなのだ。

だから私はあの人に頼った。

あの人は「カナタ」と言った。

カナタは願いをかなえてくれる。

だから、カナタといった。

本当の名前は知らない。

カナタはカナタ。

カナタは僕の願いを叶えてくれる。

姉さんは一年前の夏の暑い日に、自宅のマンションで首をくくって死んでしまった。

義兄さんとはとてもいい男で、

でも、ひどい男で、

本当にひどい男で、

姉さんが自宅で宙ぶらりんになっているとき、

どこか別の女と、

楽しく軽井沢旅行に出かけていて。

そうして、義兄さんが自宅へと帰ってきた時、

その時はもう、姉さんはひどい有様で、

宙ぶらりんの姉さんには、

ひどい、ウジ虫とか、ひどい、匂いとかがしていた。

テーブルの上には義兄さんの為に作っていた、手の込んだ料理が残っていて、

ビーフシチューとか、そういう手の込んだ料理があって、

でも、結局は姉さんと同じく、ひどい匂いになって、

ひどい、虫けらたちがたくさんのかかっていたのだと、聞いた。

姉さんのマンションはとても日当たりが良かったから、

夏場なんてそりゃあもう、暑くて、

冷房をかけていてもカーテンをしていなければ、日差しがたまらなく暑くて。

だから、姉さんは暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い、

夏の日差しにじりじりと焼かれて、

いつも、姉さんのマンションは良い匂いがしていて。

ベージュを基調とした家具は姉さんの趣味で。

相変わらず姉さんは趣味がいいなと僕は思っていたし、  
実際、伝えたこともあった。

でも、ベージュの家具も、真っ白いカーテンも、  
素敵な匂いのするLDKのマンションの部屋も、  
全部、全部、よどんだ色になって、よどんだ匂いに包まれて。  
イカのはらわたを三角コーナーに放置して、2日経ったかのような匂いになってしまっ  
て。まるでただの生ごみのようになってしまった。

姉さんの体は赤黒く、なっぺい。

僕は、姉さんの顔を見せてもらえなかった。

警察署に連れていかれた姉さんは灰色の袋の中に入れられていて、  
見せてもらえなかったんだ。

姉さんの葬式はひどい匂いだった。

姉さんの匂いが漂っていた。

それはひどい匂いだったが、

僕は、いい匂いだと思うことにしたら、

その匂いはとてもいい匂いだと感じることが出来たから、  
人間の五感というのも、

なんだか、ふわふわしたものなんだな、と、思った。

その匂いはベージュの匂いがした。

あるいはビーフシチューの匂いだったのかもしれない。

姉さんが、僕の為にビーフシチューを作ってくれたんだ。

だから、僕はそのビーフシチューを食べなきゃならないんだ。

ビーフシチューの匂いのする姉さんが、  
火葬場で焼かれてしまって、  
それではまるで焼肉みたいじゃないか、  
と、にやにや笑っていたら、  
義兄さんが、

「何笑っているんだ」  
と怒ってきた。

この人は、何を言っているんだろうか。  
と、思った。

だって、姉さんが焼かれてしまったのは、この人のせいなのに。  
なんでこの人は、まるで自分が被害者のような顔をして、

ここにいるのだろうか？

偉そうに喪服を着て、

偉そうに姉さんの大切な人を気取っていて、

偉そうに、母さんや父さんと話をして、

泣いている母さんと父さんを偉そうに慰めていて。

偉そうに。

とにかく偉そうにしている。

僕はだから、その顔がすごく男前だなと思った。

端正な顔っていうのはこういう顔を言うのだなと思った。

姉さんはどちらかというと素朴な顔立ちだったから、

二人一緒にいると、なんだか姉さんが引き立て役のように見えたりして、

僕はそれがなんだかとも気持ち悪かったんだ。

姉さんの隣にいるのはこの男の人ではないと、

僕は昔から思っていた。

今でも思っている。

では、誰が姉さんの隣にふさわしいのだろうか。

きっと、それは僕に決まってる。僕に決まってるんだ。

ずっと、ずっと、涙が出なくて。

ずっと、ずっと、涙が出なくて。

なぜこんなにも涙が出ないのかと思っていた。

きっと、僕は、姉さんが死んでしまったのだと、

思っていないのだと思った。

思っていた。

姉さんは死んでいない。

いなくなっただけなんかない。

燃えて、

体が燃えて、

臭いからだが燃えて、

首をくくって、

一人で死んだ、

姉さんは、死んでいないんだ。  
だって、僕は生きているんだ。

姉さんだけ死んでいるなんておかしいじゃないか。

世の中みんなが生きていて、

おいしい物とか食べているのに、

僕はもう、何を食べても、姉さんの肉の味しかしないのに。

腐った、いとおしい姉さんの匂いしかしないのに。

それを僕はおいしいと思っているけれど、

でも、やっぱり、

姉さんだけどこにもいないなんておかしいじゃないか。

みんな生きている。

だから、僕も生きている、

だから、姉さんも生きている。

体がないだけだから。

体がないだけだから、姉さんの体を新しい体が必要なんだ。

だから僕はカナタを頼ることにした。

カナタは、カナタで。

カナタは、カナタだ。

僕が小さいころから、

何か困ったことがあると、僕はカナタを頼ることになっていた。

だから今回も、カナタに頼ることにした。

カナタは素敵な笑顔で、

「君の為ならいいよ」

と、言ってくれた。

その顔はどこか姉さんに似ていたような気がした。

カナタは、儀式が必要だと言った。

姉さんの体を作らないといけないんだと、

カナタは言った。

どんな材料が必要なの？

と、僕は尋ねた。

肉が要るんだよ。

と、カナタは言った。

どんな肉がいいの？

と、僕は尋ねた。

人の肉がいいね。

それが一番いいよ。

と、カナタが微笑んだ。

その顔はとても姉さんみたいだった。

最近、イロイロナヒトガミンナネエサンニミエテシカタナインダ。

母さんも、父さんも、おばあちゃんも、学校の先生も、

ミンナミンナ、ネエサンニミエルンダ。

誰のが一番いいの？

と、僕は聞いた。

そうだね。

カナタは考えて、答えた。

君の姉さんが好きだった人の肉がいいんじゃないかな？

わかった。

もってくるよ。

と、僕はカナタに告げた。

だから、僕はあの人を殺した。

あの人、あの方は唯一、姉さんの顔になっていなかったから、躊躇なんて要らなかった。

あの方は、もう、別の女と一緒にになっていた。

そういう感覚はよくわからないのだけれど、

それを許すとか、許さないとか、そういう感覚はよくわからないのだけれど、

さしあたり、姉さんが好きだった人というので心当たりがあるのが、

あの人だったから、あの方の肉だったら、いいかなと思って、

僕はあの人を殺した。

一緒にコーヒーを飲みに行こうよ。

久しぶりに電話をしたら、あの人はいくらかうっとおしいようなニュアンスの声を出したけれど、きつと罪悪感みたいなものもあったのだろう。

少し、僕が駄々をこねると、会ってくれることになった。

あの人は車で僕のことを迎えに来てくれて、

そうして、せっかくだから、どこか遠いところに連れて行ってよと、また、少し駄々をこねた。

あの人はため息をつきながらも、僕を連れて行ってくれた。

車の中であの人はなんとなくの会話をしていた。

僕はなんとなくの会話をとても楽しそうに話した。

何の話をしたのかは忘れてしまった。

そうして、一時間ぐらい車を走らせて、途中のコンビニかどこかでお茶とかお菓子とかを買って、そのまま海の方まで行って、

海岸沿いにある道に止まって、

外に出て、二人で夜の海を眺めて、

ざざーん、ざざーんと、真っ黒い夜の海がうねっていて、

ソレハトテモスイコマレソウダナトオモイナガラ、

僕はあの人の首を用意していた太めのロープで思い切り、

絞めた。

暴れて、暴れて、あの人は暴れて、

抵抗して、僕もいくらか傷ついただけけれど、

まあ、そんなことはどうでもよくて。

ぐいぐいと締め上げて、

締め上げて、

締めアゲテ、

締め上げて、

シメアゲテ、

締め上げて、

締め上げて、

締めアゲテ、

シメめ上げて、

締め上げて、

締め上げて、

シメアゲテ、

締め上げて、  
締め上げて、  
シメアゲテ、  
締め上げて、  
締め上げて、  
締め上げて、  
シメアゲテ、  
そうして、また、夜の海がざざーん、ざざーんと、聞こえてきたら、あの人はぐったりとなっていた。

ボクハアノヒトノカラダヲアノヒトノクルマニノセテ、アノヒトノクルマヲウンテンシテ  
アノヒトヲカナタの元に連れて行った。

カナタはもう、いろんな準備をしてくれていて。

チイサナコヤノナカニ、チイサナトリイトオオキナトリイトチュウクライノトリイガアツ  
テ、

あとは、カナタは神主様のような格好で僕を迎え入れてくれて、  
祭壇があって、あの人をその祭壇の前に置くようにカナタは言った。

カナタは何かをつぶやきながら、あの人の周りをまわっていて。  
それで、そうして、何時間かそうしていたんだけど、

ダメだ。

と、カナタは言った。

何がダメなの？

と、僕は聞く。

もっと、必要みたいだ。

と、カナタが言うので、

僕は、姉さんの好きだった人たちを殺して回ることにした。

カアサンヲサシ殺し、  
父さんを殴り殺し、  
おばアチャンヲシメ殺し、  
おじいちゃんヲキリ殺した。

ボクノメニ、カゾクハミンナアネサンの顔に見えていたので、  
ミンナみんな姉さんの顔で死んでいった、  
ああ、これでは僕は姉さんを殺しテイルミタイダナトオモッタノダケレど、  
でも、こウヤツテコの世界で姉さんヲコロシテマワレバ、コノセカイノナカニイル姉さんが  
いなくなつて、きつとあっちに行つてしまつた姉さんが帰ってくるのかもしれないな。  
ソレも道リダナア、トオモツテ。  
そう思つたんだよ、とカナタに言ふと、

カナタは姉さんの顔をして、  
ワラツテ、  
ワラツテ、イタ。

たくさん姉さんの死体をたくさんカナタのところにもつていつて、  
そうして、たくさん姉さんに向かつてカナタは儀式をした。

ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ  
ダメ、ダメ、ダメ

ダメだ。  
何人殺しても、  
何人捧げても、姉さんは帰つてこない。  
帰つてこない。  
帰つてこない。

帰ってこない。

僕は悲しくなっていた。

とても悲しくなっていた。

だって、いつまでたっても、姉さんに会えないんだ。

カナタは約束してくれたのに、

カナタはカナタは、カナタは。

僕は横たわるカナタに問いかける。

カナタは首だけになってしまっていた。

けど、僕には姉さんに見えるから、

ネエサンニミエルツテコトハ、ボクニトツテハネエサンダツテイウコトダカラ、だから、ボクニトツテハ姉さんってことで。

姉さんは姉さんのことが好きだろうから、僕はカナタを殺して首だけにして、儀式を続けさせたんだ。

小屋の中は真っ赤で、真っ赤で、真っ黒になって、

ああ、鳥居はどんな色だったのか。

赤い赤い赤い赤い赤いのは、血の色だったのか。

そこかしこに、姉さんの首がある。

目のない姉さん、

鼻のない姉さん、

口の縫いあわさった姉さん、

首のない姉さん、

姉さんの手、

姉さんの肌、

姉さんの骨、

姉さんの心臓、

姉さんの、

姉さんの、

姉さんの、ネエサンノ・・・。

生きた姉さんはどこにもおらず、  
ただ、死んだ誰かの肉の中で、僕は泣いていた。

おびただしい、肉の中で、僕は涙を止めることが出来ず、  
ただ、ただ、愛おしい姉に会いたいと、ただ、その気持ちだけが、  
どうしようもなかった。

まだ、いる、  
と。

姉さんたちが言った。

私の好きだった人が、まだいるよ。  
と。

そうだね、  
と、僕は、思った。

言った。

言った声は姉さんの声に聞こえた。

姉さん、また会えるかな？

また会えるよ、

姉さんたちの声の中、  
僕は、宙ぶらりんになった。